

建設業と農林水産業の連携シンポ

建設業のノウハウを生かした事例発表

農林水産省と、新事業などに挑戦する地域の建設業者で構成する建設トッパンナー倶楽部（TRC）、米田雅子代表幹事は1日、第3回建設業と農林水産業の連携シンポジウムを東京・霞が関の農水省で開いた。テーマは「過疎地域の再興を目指して」。地域の活性化や雇用の創出を目指して建設業が取り組む、ICTを活用した稲作や、LEDを使ったイチゴの閉鎖型植物工場などの事業が発表された。企業や国、地方自治体などから約230人が参加した。

シンポジウムの冒頭、あいさつに立った農林水産省の末松広行事務次官は、「組織的な仕事や労務管理のノウハウなど、多様な知恵が結び付き、地域資源を活用し、地域を再生させることが大切だ」と述べ、建設業の農林水産業への参入の意義を強調し、今後の展開に

期待感を示した。シンポジウムで発表したのは▽和仁建設（岐阜県）▽小野組（新潟県）▽竹内組（青森県）▽菅野組（北海道）▽佐久間建設工業（福島県）▽飯古建設（島根建）の6社。

和仁建設は、中山間地域での稲作の悪条件を克服し、付加価値の高い米を生産するため、独自の稲作業務管理ソフトや、GPSで自動走行する除草機を開発。生産した米は、「米・食味分析鑑定コンクール」で金賞を連続授賞するなどしている。

小野組は、中山間地で廃校になった小学校を利用し、LEDを使ったイチゴの閉鎖型植物工場を整備、通年の安定的な収穫に成功した。イチゴを使った多様な商品開発や、栽培システムそのものの販売にも取り組んでいる。

竹内組は、米づくりに代わる、地域の特産物のブランド化を進めるため、サクランボ栽培と観光農園の整備を行った。観光農園の来場者は年間1500人の目標を達成



農水省の講堂が約230人の参加者で埋まった

した。このほか、木材のペレットの製造販売や、菊芋栽培や菊芋焼酎の販売も行っている。

菅野組は、建設業のノウハウと自社の採石跡地を有効利用し、地域の特産品としてジュンサイの栽培に成功した。また、北海道内の林業発展の基盤づくりに向けて、苗木のコンテナ生産を開始した。

佐久間建設工業は、奥会津の標高を生かした夏秋採りイチゴや高原野菜の栽培によって、豪雪地での周年営農を実現した。また、森林の荒廃を防ぐため、育林から販売まで一貫して行う林業経営にも取り組む。集落の再興に向け、古民家再生によって首都圏のIT企業も誘致した。

島根県・隠岐の島の飯古建設は「地域の農業、林業、水産業があるからこそ会社は存続する」という信念によって、定置網漁業や畜産業に取り組んできた。定置網事業にはイターンの9人、畜産には、イターンを含め16人が働き、地域の雇用の創出と活性化に寄与している。

これらの事例発表に対して農水省と国土交通省、林野庁、水産庁の幹部がアドバイザーとして講評を述べた。アドバイザーからは、「地域への密着と地域資源の活用、地域の問題解決」や「地域の建設業が持続的に地域に存在し、地域を守っていくための異分野への進出」を評価する声などが聞かれた。

テーマは「過疎地域の再興を目指して」